付属資料 2

雑誌『ロシア語愛好者の友』の著作家の経歴[1]

1. エカテリーナⅡ世（1729-96、在位 1762-96）

プロセインの将軍の娘（本名ゾフィー・フリードヒナ・アウグステ）として 1729 年に生まれる。エリザヴェータ帝からピョートルⅢ世の妃として招かれ、ロシア正教に改宗し、ピョートルⅢ世と挙式する。1762 年に宮廷クーデターでピョートルⅢ世を廃位し、即位する。啓蒙君主と呼ばれ、文化活動の庇護者となると同時に自らも作家活動をおこなう。『ロシア語愛好者の友』には『ロシア史覚書』と『実話と絵空事』を寄稿すると同時に雑誌の最終編集者でもあることが知られている。

2. I.F.ボクダノーヴィチ (1743-1803)

貧しい貴族出身。1754 年モスクワの法務参議会付属士官学校生徒となり、同時に元老院の付属数学学校で学ぶ。モスクワ大学理事 M.M.ヘラスコフの支援によりモスクワ大学付属ギムナジウムの生徒になり、ヘラスコフ宅に下宿する。その後モスクワ大学に学ぶ。1762 年頌詩を書き、1765 年にヴォルテールの作品を翻訳する。1764 年外務参議会の翻訳官として採用され、同年「自由経済協会」の会員となる。1766 年在サクソニア・ロシア大使館の書記官となり、ドレスデンに 1769 年まで滞在、帰国後外務参議会の翻訳官の仕事を続けると同時に、文筆活動もおこなう。1778 年に詩作品『ドゥーシェンカ』を出版する。『ロシア語愛好者の友』にはエカテリーナⅡ世寄りの作家として作品を寄せる。1783 年設立されたばかりのロシア・アカデミー会員となる。1785 年にはエカテリーナⅡ世の命を受けてロシアの諺集を出版する。

3. E.R.ダーシコヴァ (1743-1810)

上流貴族のヴォロンツォフ家に生まれる。幼い時から家庭教育を受け、語学に堪能。1762 年の宮廷クーデターに夫ダーシコフ公爵と共に参加。夫の死後、子供の教育のために 2 回に及ぶ外遊(1769-71、1775-82)で海外の啓蒙の成果を実体験する。外遊中にアダム・スミス、ディドロ、ヴォルテールなど当時の優れた啓蒙学者と知己をえる。1763 年にヴォルテールの『叙事詩の経験』を翻訳し、エルヴェシウスの『精神論』の一部も翻訳する。エカテリーナⅡ世により、1783 年科学アカデミー院長に、その後ロシア・アカデミー総裁に任命される。この時期啓蒙を広める手段としての出版活動に注目し、科学アカデミー院長として力をいれ、雑誌『ロシア語愛好者の友』、『新しい毎月の作品』などを科学アカデミーから出版する。雑誌には、自ら匿名で教育分野の論文と国民意識の覚醒を訴える論文などを寄せる。

4. G.R.デルジャーヴィン（1743-1816）

1743 年にカザン市の落ちぶれた貴族の家に生まれる。カザン市のギムナジウムで学ぶが、卒業せず、その後正式に教育を受けることなく、プレオブラジェンスキー連隊に一兵卒として入隊し、軍務につく。後に文官となる。1773 年に初めて詩を発表する。1782 年に書いた頌詩『フェリーツァに』は、カプニストの助言にしたがって、エカテリーナⅡ世の側近の激怒を憂慮し、

当初印刷することはなかったが、雑誌『ロシア語愛好者の友』の編集者コゾダヴレフがこの詩をデルジャーヴィンの許可なしに掲載し、『ロシア語愛好者の友』の第 1 号巻頭を飾ることになる。ロシア・アカデミーの創立にあたり、会員に選ばれる。エカテリーナⅡ世は第Ⅰ号に掲載された頌詩を気にいり、報奨金と金製の煙草入れを贈る。しかし、元老院検事総長 A.A ヴァーゼムスキーは自らが風刺されていると思い、当時文官だったデルジャーヴィンを 1784 年 2 月 15 日に辞職に追いやる。この辞職については、フォンヴィージンが第 3 号のエカテリーナⅡ世に宛てた『質問状』の中で触れている。1785 年デルジャーヴィンはタムボフ県の県知事に任命され、1793 年には元老院議員に選出されている。

5. Ya.B.クニャジニン (1740-91)

軍司令官の息子として生まれる。1750 年科学アカデミー付属ギムナジウムで学び、フランス語、ドイツ語、及びイタリア語に通暁し、建設官房の翻訳官となる。1762 年軍勤務に移り、K.G.ラズモフスキー将軍の参謀にはいり、1764 年には大尉となる。1772 年公金横領で裁判沙汰になり、死刑判決を受ける。しかし、減刑され貴族の身分・官位・領地所有権を剥奪され、ペテルブルグ警備隊の一兵卒として登録される。その後家計を助けるため翻訳活動にいそしむ。1777 年に大尉の官位に復職する。1778 年から 1781 年にかけてブライコ、アルンドトと共に雑誌『サンクト・ペテルブルグ通報』やノヴィコフの雑誌などにも参加する。1783 年ロシア・アカデミー会員に選ばれる。雑誌『ロシア語愛好者の友』には詩や寓話を寄せる。死後の 1793 年に劇作品『ノヴゴロドのヴァジム』をめぐって、出版統制に関わる事件が起きている。

6. D.I.フォンヴィージン (1744(45)-92)

ロシア化したバルト海沿岸の貴族出身。1755 年モスクワ大学付属ギムナジウムに入学、その後モスクワ大学哲学科を卒業。卒業後外務参議会に翻訳官として配属され、1763 年には宮廷人事長官 I.P.エラーギンの秘書官となる。1769 年から 1783 年まで N.I.パーニン伯爵のもとで外務省秘書官を勤める。1761 年にドイツ語作品を翻訳、1762 年にペテルブルグに移って後、本格的に文筆活動をおこなう一方で、国家勤務を続ける。1769 年に喜劇『旅団長』を、1782 年に『親かがり』を記し、劇作家として彼の名を不朽なものにした。ノヴィコフの雑誌にも参加している。1777 年から 1778 年療養のため西欧旅行をし、その際に痛烈な西欧批判の『フランスからの手紙』を記す。雑誌『ロシア語愛好者の友』には『ロシア同義語の経験』、『ロシアの作家からロシアのミネルヴァへの請願書』、『質問状』、『偽りの聾唖者の物語』などを記す。特に『質問状』はエカテリーナⅡ世への痛烈な批判文書であり、女帝からの不満を呼び起こした。病身にもかかわらず、1788 年自らの雑誌『スタロドゥーム、誠実なる友』の発行を計画するも、エカテリーナⅡ世から発行認可を得ることができず、発行に至らなかった。1783 年のロシア・アカデミーの設立当初からの会員で、『ロシア・アカデミー辞典』の編纂には企画者として積極的に参加し、重要な役割を演じる。

7. V.A.リョーフシン (1746-1826)

モスクワ南部トゥーラ県の地主で、貧しい将校の息子として生まれる。1765 年から軍務につく。1772 年病気で軍務をやめ、故郷に戻る。1803 年サンクトペテルブルグで文官となる。ノヴィコフの依頼によりドイツ語やフランス語、イタリア語の作品を翻訳する。フリーメーソン

だったとされる。長編小説、民話、戯曲、寓話を書く。また農業、獣医学、経済に関する書籍の著者としても知られる。雑誌『ロシア語愛好者の友』にはユートピア小説『新しい旅行』などを寄せる。特にリョーフシンの民話集は多くの読者を集め、後にプーシキンが作品『ルスランとリュドミラ』を書いた時に参考にしたとされる。

8. M.M.ヘラスコフ（1733-1807）

ロシアに移住したワラキア（現在のルーマニア）の貴族の家に生まれる。陸軍士官学校で学び、軍務についた後文官に転じる。長くモスクワ大学に勤務し、1755年の開校と共に事務官、1778年には理事となる。モスクワのフリーメーソンの有力なメンバーの一人で、ノヴィコフの出版活動にも協力する。近代的叙事詩『ロシアーダ』を書き記した。雑誌『ロシア語愛好者の友』には詩と散文を寄せる。

9. D.I.フヴォストフ (1757-1835)

伯爵の称号を有する。モスクワ大学に学び、1772年プレオブラジェンスキー連隊に勤務、1779年に少尉で退官する。一時期故郷で暮らすが、1783年元老院の会計検査官となる。この時期元老院検事総長ヴァーゼムスキーのために、ネッカーの財政に関する文書を翻訳する。文学分野では才能のない詩人とされている。雑誌『ロシア語愛好者の友』には詩や寓話作品を寄せている。

10. O.P.コゾダヴレフ (1754-1819)

軍人の息子で、早くに両親を亡くす。1769年にラジーシチェフと共にエカテリーナII世がライプツィヒ大学へ派遣した12人の中に選ばれ、哲学と法律を勉強する。1774年に大尉の身分で元老院調査官となり、1783年科学アカデミー院長ダーシコヴァ公爵夫人の顧問官となる。雑誌『ロシア語愛好者の友』には編集者として関与し、論文と詩を寄せ、翻訳活動も積極的におこなう。1783年ロシア・アカデミー設立と同時にアカデミー会員となる。

11. A.K.メイエル (1742-1807)

サクソニアの名門貴族の家に生まれる。1783年砲兵連隊副官で、1807年には少佐となる。1781年から1783年の間に植物学辞典2巻を発行する。フランス語から医学書を翻訳、また鉱物、植物、動物相まで記した地域史の3巻本を発行する。雑誌『ロシア語愛好者の友』には第1号でロシア君主への献辞、さらに第2号と第10号に匿名で書簡を寄せている。

12. M.N.ムラヴィヨフ (1757-1807)

軍事技師の息子としてスモレンスクに生まれる。家庭教育を受け、8歳からドイツ語、ラテン語、フランス語、数学などを学ぶ。1768年モスクワ大学付属ギムナジウムに入学、その後モスクワ大学に入学し、1768年から翻訳活動を始める。1772年にイズマイロフスキー連隊で軍勤務を始める。1803年には国民教育省次官、及びモスクワ大学理事となる。雑誌『ロシア語愛好者の友』には詩作品を寄せている。

13. P.P.イコソフ (1760-1811)

雑階級出身だが、文化的に裕福な家庭出身。モスクワ大学付属ギムナジウムで学び、1777年にモスクワ大学に入学する。1781年文官として元老院に勤務し、1797年には元老院書記官となる。フリーメーソンの影響下にあったとされ、最初の作品はノヴィコフが出版、シュワルツ教授が編集を担当した雑誌に掲載される。

14. V.V.カプニスト (1758-1823)

カプニストの祖父はギリシャ出身で、父親は軍人、母親は家庭教育に熱心で、ドイツ語、フランス語の語学教育を息子に授ける。1771年イズマイロフスキー連隊に勤務し、その時一緒に勤務していたデルジャーヴィンらと共に、文学サークルを形成する。その後文官となるも、文筆活動を続ける。

15. A.V.ナルィシキン (1742-1800)

上流貴族出身で、最高の家庭教育を受ける。1773年宮廷侍従となる。その後も順調に出世を続け、南ヨーロッパ、ドイツ、フランスなどを業務や旅行で訪問し、旅行先でディドロ、ベッカリアなどと知己を得て、文通を続ける。エカテリーナⅡ世によるディドロのロシア招聘に大きく関与する。1759年から詩や翻訳作品を発表する。ダーシコヴァ公爵夫人と仲が悪く、雑誌『ロシア語愛好者の友』にはロシア・アカデミーを風刺した散文を寄せる。

16. S.P.ルミャンツェフ (1755-1838)

父親はスヴォーロフ将軍と並んでロシアの軍事学校を築いた有名な軍人。上流貴族出身で、17歳でエカテリーナⅡ世からエルミタージュに招聘される。オランダのライデン大学を1775年に卒業、エカテリーナⅡ世の文通相手だったグリム、ヴォルテールなどと交遊を持つ。雑誌『ロシア語愛好者の友』には匿名で女帝と寵臣政治を批判する文章を寄せる。

17. E.I.コストロフ (1755-96)

堂務者（正教教会最下位勤務者）の息子として生まれ、1766年ヴァトスキー宗教セミナリアに入る。1778年モスクワ大学に入学し、大学で翻訳活動をおこない、エカテリーナⅡ世や皇帝家族の誕生日に頌詩を発表する。1784年雑誌『ロシア語愛好者の友』第10号にデルジャーヴィンの頌詩『フェリーツァに』に関する論文を寄せる。詩よりも大きな文学上の意味を持つのがコストロフの翻訳活動であり、ホーマーの『イリヤード』などの翻訳をおこなう。

18. M.V.スシコヴァ（フラポヴィツカヤ）(1752-1803)

女流詩人で翻訳家、結婚前の姓はフラポヴィツカヤ。1770年代の初めにヘラスコフの文学サークルに参加し、翻訳・文筆活動をおこなう。雑誌『ロシア語愛好者の友』にはロシア・アカデミー設立に関する作品を寄せる。

19. M.M.ジューコフ (1728-1803)

上流貴族の生まれ、一族の伝統にのっとり、軍人の道に進み、中佐まで進む。1777年にスモレンスク県副知事となり、後に元老院議員(1787-98)となる。雑誌『ロシア語愛好者の友』の第

3号に詩を寄せている。

20. P.I.ゴレニシチェフ=クトゥーゾフ（1767-1829）

海軍幼年学校の学校長I.L.ゴレニシチェフ=クトゥーゾフの息子で、海軍に勤務する。1783年には大尉の官位で、G.A.ポチョムキンの副官となり、その後も順調に出世し、1786年には中佐となる。文筆活動は1780年代前半に始め、文学の師であるボグダノーヴィチの推薦により雑誌『ロシア語愛好者の友』の第5号に詩が掲載される。

21. Yu.A.ネレジンスキー=メレツキー (1752-1829)

上流貴族の出身。母親を小さい時に亡くし、クラーキン家出自の祖母の手で育てられる。幼い時よりフランス語、イタリア語、ドイツ語を習得し、1769年にフランスのストラスブール大学で学び、帰国後軍人としての道を歩む。1785年中佐で退役する。モスクワに戻り、ヘラスコフ、カラムジンなどと知己を得て、積極的に文筆活動に参加する。雑誌『ロシア語愛好者の友』には詩を寄せる。その後、雑誌『新しい毎月の作品』や『モスクワ・ジャーナル』などにも翻訳作品を寄せる。

22. D.G.レヴィツキー（1735-1822）

ウクライナの名門貴族の家系で、父親は貴族身分の聖職者である。18世紀を代表する肖像画家であり、芸術アカデミー会員である。雑誌『ロシア語愛好者の友』の第6号に献辞を寄せる。

23. プロホル・ソロヴィヨフ（不明）

雑誌『ロシア語愛好者の友』の第10号にサンクト・ペテルブルグに新しく設立されたセミナリア神学校の開校に際して『ミューズに関する会話』を寄せている。

24. F.Ya.コゼリスキー (1734-99)

軍コサックの家庭出身。キエフ・モギリャンスキー・アカデミーで学び、修辞学のクラスを卒業し、科学アカデミーのギムナジウムに入るが、両親の看護のため故郷に戻る。1769年軍勤務から文官勤務に移り、外務参議会で働く。ノヴィコフ、ルキンらの雑誌に風刺作品を寄せ、詩作品も積極的に発表する。雑誌『ロシア語愛好者の友』の第10号にR.L.ヴォロンツォフに宛てた墓碑文を寄せる。

25. I.M.ドルゴルーコフ（1764-1823）

上流貴族の出身だが、18世紀に一族の栄誉は急激に失墜し、父親が流刑中に生まれる。不幸な境遇の下でも最高の家庭教育を受け、特にラテン語の知識に優れる。1778年モスクワ大学に入学、卒業することなく、軍勤務につく。1779年から翻訳活動を始める。1791年ペンザ県の副知事となる。雑誌『ロシア語愛好者の友』には詩を寄せている。

26. A.F.ラブジン（1766-1825）

貧しい貴族出身で、1776年モスクワ大学付属ギムナジウムに入学、その後モスクワ大学で学ぶ。ラテン語、ドイツ語、フランス語、英語に堪能。ヴォルテールなど啓蒙家の作品に夢中に

なる。フリーメーソンのシュワルツ教授の講義を聴講する。この頃ノヴィコフとも知己をえる。大学生の時にフランス・マニアを風刺した詩を匿名で書き、雑誌『ロシア語愛好者の友』に掲載される。フリーメーソンとなり、大学卒業後の 1784 年にモスクワ県庁に翻訳官として勤務し、1787 年からモスクワ大学事務局の翻訳官となる。

27. M.V.ロモノーソフ（1711-65）

アルハンゲルスクに近い網元の家に生まれる。身分を隠して、1730 年スラヴ=ギリシャ=ラテン・アカデミーに入学、1735 年ペテルブルグの科学アカデミー付属大学に入学、ドイツへ留学、主として自然科学を学ぶ。1739 年に『ロシア詩法についての書簡』と『ホチン占領に寄する頌詩』をドイツから科学アカデミーに送付する。ロシア詩法を確立し、『修辞学』(1748)、『ロシア文法』(1755) を記す。1757 年に『ロシア語における教会文書の高揚に関する緒言』を記し、三文体論を主張し、ロシア語の発展に大きな影響を与える。文学者だけでなく、科学者としても優れる。雑誌『ロシア語愛好者の友』の第 11 号に未発表の詩が掲載される。

28. S.S.ボブロフ（1765-1810）

司祭の息子。1774 年に宗教セミナリアに、1780 年モスクワ大学付属ギムナジウムに、1782 年にモスクワ大学に入学する。大学時代にラテン語、ドイツ語、英語を学び、大学卒業後ペテルブルグに移住する。1800 年にペテルブルグの海軍省で翻訳官として勤務する。雑誌『ロシア語愛好者の友』には詩を寄せる。

29. P.A.プラーヴィリシチコフ（1760-1812）

商人の家に生まれる。1768 年モスクワ大学付属ギムナジウムに入学、1776 年からモスクワ大学哲学科で学ぶ。フランス語、英語、ドイツ語を習得し、1779 年大学卒業後俳優となる。1780 年代に文筆活動を始め、演劇に関する論文や戯曲を記す。

30. A.S.フヴォストフ（1753-1820）

D.I.フヴォストフ伯爵の従兄弟、青年時代に多くの翻訳に携わる。科学アカデミー付属ギムナジウムを卒業後、元老院に勤務する。第 2 次トルコ戦争に参加し、軍功を馳せる。雑誌には頌詩『不死』を第 10 号に寄稿する。1793 年にはロシア・アカデミー会員となる。

(作品数の多い順番で経歴を記載)